

34. 新生児マススクリーニングの高ガラクトース血症に対する経直腸門脈シンチグラフィの有用性

池岡 直子 塩見 進 佐々木伸充
 栗山 真紀 森川 浩安 正木 恭子
 城村 尚登 黒木 哲夫 (大阪市大・三内)
 河邊 譲治 越智 宏暢 (同・核)
 岡野 善行 一色 玄 (同・小児)
 藤本 昭栄 (大阪市環境保健協会)

われわれは以前より経直腸門脈シンチグラフィを用いて、肝疾患における門脈循環動態の検討を行ってきた。今回は新生児マススクリーニング検査にて高ガラクトース血症を指摘された症例に本検査を施行し、その臨床的有用性を検討した。

対象は新生児マススクリーニングにて高ガラクトース血症を指摘された男児 4 例、女児 2 例の計 6 例で、年齢は 1 か月から 2 歳であった。それらの症例に対し、 ^{99m}Tc -pertechnetate 111 MBq を直腸腔内に注入後、5 分間データ収集を行って積算イメージを作成し、さらに肝臓および心臓の time-activity-curve より門脈シャント率を算出した。

その結果、門脈シャント率 20% 以上を示したのは 2 例で、ともに脾腎シャント、すなわち門脈系の側副血行路が認められ、うち 1 例は先天性門脈欠損症と診断された。一方、門脈シャント率が 20% 以下であった 4 例ではいずれも門脈系の側副血行路は認められず、うち 2 例は新生児肝炎で、残りの 2 例は一過性の高ガラクトース血症であった。また肝機能検査値は、門脈シャント率の高い群と低い群との間に有意差を認めなかった。

以上のように本検査は、非侵襲的に、高ガラクトース血症を示す新生児の鑑別診断を行える有用な検査であると考えられた。

35. FDG-PET が治療効果および再発の判定に有用であった肝癌の 1 症例

森川 浩安 塩見 進 佐々木伸充
 栗山 真紀 正木 恭子 城村 尚登
 池岡 直子 黒木 哲夫 (大阪市大・三内)
 下西 祥裕 重松 誠 河邊 譲治
 岡村 光英 越智 宏暢 (同・核)

昨年度の本地方会において、FDG-PET が肝細胞癌 (HCC) の治療効果判定に有用であった症例を報告させていただいたが、その症例の経過途中にきたした再発の発見にも FDG-PET が有用であったので報告する。

症例は 46 歳、女性、C 型慢性肝炎にて当院通院加療中であった。腹部エコーにて肝 S3 領域にモザイク状の SOL を認め、腫瘍マーカーである AFP の上昇を認めたため、HCC を疑いその精査、加療目的にて、入院となった。入院後、血管造影等施行し、HCC と診断した。肝表面に突出するように存在したため、腹腔鏡下マイクロ波凝固療法 (LMCT) を施行した。LMCT 前後に FDG-PET を施行し、治療後の hot spot の消失が確認でき、また半定量的指標である DAR 値も 5.47 から 0.46 と background レベルまで減少した。CT, MRI の画像診断や AFP の変動からも残存腫瘍はないものと考えられた。

次にその経過中約 2 年後に AFP の上昇を認め、再発を疑い再発巣の検索を施行した。FDG-PET 像では前回治療部位の腹側に hot spot を呈し、DAR=3.17 と高値で再発巣と考えられた。同時期の CT, MRI 等では描出し得なかったが FDG-PET では明瞭に描出し得た。

HCC の治療効果の判定では、現在、造影 CT, MRI がよく使用されているが、今回 FDG-PET が他の画像診断、腫瘍マーカーの変動によく相関し、効果判定に有用であった。さらに、その経過中の再発に対して、再発巣の観察に有用であった。